

## 中国 徽州建築に関する研究

### —中国の伝統的架構形式と徽州建築の独自性について—

#### Keywords

中国 安徽省 徽州建築  
古民家 構法 穿斗式

AK13032 木村 有花



#### 1. 研究概要

##### 1.1 研究背景と研究目的

中華人民共和国は非常に長い歴史を持ち、日本の建築様式にも大きな影響を与えている。そこで、中国の建築物について、理解し考察をおこなう。中国に現存する住宅の中でも明代のものは非常に古いとされ、安徽省には明清代の住宅が多く存在している。中でも安徽省黄山市は特に、古い住宅が多く残る地区として知られている。黄山市に残る古民家を取りあげ、意匠や建築架構形式の特異性について研究を行う。

##### 1.2 研究方法

現地調査や実測図面集をもとに、先行研究や文献との比較を行う。そこで、周辺地域の建築物との形式や構法の類似点・相違点について考察し、この地域の古民家の特徴を明らかにする。

##### (1)現地調査

黄山市内の古民家について、実測調査や見学、現地の人へのヒアリングを行い、その特徴を明らかにする。

##### (2)考察

先行研究や文献をもとに、周辺地域の住宅形式や、中国の伝統的架構形式について理解する。

##### (3)比較

(1)と(2)を比較し、類似点・相違点について考察を行う。また、類似する建築物に関して、分布する地域を明確に示し、その源流について推測する。

##### 1.3 現地調査の概要

2016年8月10日(水)～8月15日(月)の6日間、現地調査を行った。黄山市の集落と建築物の見学や、ヒアリング、実測調査等を行った。以下に各都市での調査内容を示す。

表1 現地調査

| 日程       | 調査概要               |
|----------|--------------------|
| 8月10日(水) | 歙県徽州古城、昌溪村見学       |
| 8月11日(木) | 休寧県万安老街古民家測量       |
| 8月12日(金) | 木彫工房、屯溪老街、石彫工場見学   |
| 8月13日(土) | 石彫・磚彫工房、黟県西遞村、宏村見学 |
| 8月14日(日) | 関麓村、南屏村見学          |
| 8月15日(月) | 潜口民宅、唐模村、靈山村見学     |

#### 2. 黄山市概要

黄山市は中華人民共和国の安徽省南部に位置している。安徽省は商人の街として知られ、長江を利用した東西の流通と京杭大運河を利用した南北の流通で栄えた。主に、周辺の経済圏の相互を結び、長距離の交易を担った。黄山市は周囲を山で囲まれ、徽州盆地を成している。この地域には明清時代の民家を多く残す集落が点在していて、中でも西遞村や宏村といった集落が有名で、世界文化遺産に登録されている。集落を形成する建築物はこの地域独自の形式を持っていて、この独自の建築様式を総称して徽州建築と呼ぶ。



図1 安徽省



図2 黄山市内

#### 3. 建物概要

##### 3.1 中国の住宅について

中国には邸宅や寺院・宮殿、都市全体の配置などに適応される原則が存在し、住宅もそれに沿った考え方で構築される。その原則が以下の4つである。

- ① 周囲を壁で囲む
- ② 中軸線をもつ
- ③ 南北方向である
- ④ 中庭をもつ

この原則を適応した中国の住宅の一例として、北京などの北方地域を中心に多く見られる『四合院・三合院』と呼ばれる住宅形式がある。周囲を塙で囲まれ、南面した長方形の敷地の中心には中庭があり、独立した建物が、東西南北の四方向に配置されている。

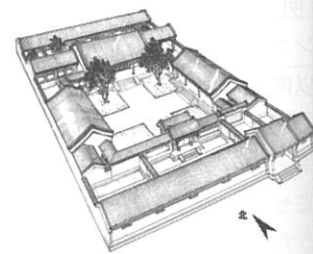


図3 四合院

#### 3.2 徽州建築概要

徽州建築の民居の平面形式は、一つの大きな空間を基準とし、そこにいくつかの『厢房』と呼ばれる小さい部屋を配置する。厢房や吹き抜け空間である天井などの配置により、代表的な4つの平面形式が存在する。厢房と

呼ばれる部屋は、個人のプライベート空間として利用された。主に、建物の1階が家の主人と妻、主人の両親の部屋として利用され、2階が息子や娘の部屋として利用された。当時、この地域では職種や階級によって住宅の間口の大きさに制限が加えられていた。そのため、基本となる平面をいくつか組み合わせ、部屋を奥や横につなげていくことにより、住宅の規模を拡大させていった。

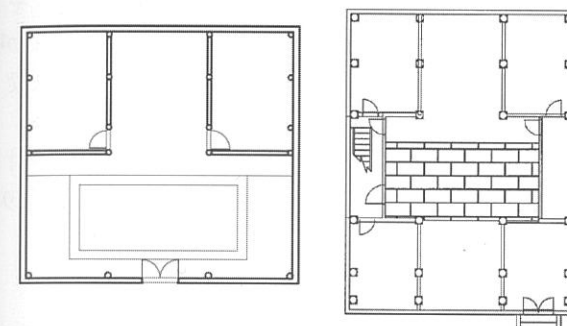


図4 徽州建築古民家 平面形式

この地域は商人の街として栄えたという歴史的背景を持っている。そのような点からこの地域独自の建築様式が発展していった。商人の家では主人が家を空けることが多く、妻と子供のみが家にいるという状況がよくあった。そのような状況下で、周囲との関わりを避けるといった傾向が生まれた。その点を考慮した徽州建築の民居の特徴として、まず『天井(テンチョウ)』がある。前に述べた四合院では、建物と独立した中庭をもっているが、徽州建築の古民家では、建物内部に吹き抜けの空間をつくり、光庭を採用している。徽州建築ではこの空間のことを『天井(テンチョウ)』と呼び、リビングや客間というような家族の共用スペースとして使われた。主に、天井は住宅の中央に配置されることが多か

った。中国では、住宅に風水的思考を多く取り入れている。天井はその家の風水的重要な役割も担っていた。また、徽州建築の民居は、外部に面した開口部をほとんど持たなかった。開口部が設けられる場合であっても、壁面上部にごく小さな窓があるのみといったように、採光のほとんどを天井に依存している。

次に、『馬頭壁』という特徴がある。中国には、住宅の周囲を塙で囲むという考え方があるが、この地域ではその塙を馬頭壁と呼び、独自の形をしている。馬頭壁は建物の周囲、



写真3 馬頭壁

もしくは隣接する建物と建物の間に設置され、屋根より高く設計されている。住宅周囲の塙がこれだけ高いというのは、他の地域には見られない特徴である。馬頭壁は周囲からの視線を遮るとともに、火災発生時、近隣の住宅に燃え広がるのを防ぐことに役立ったとされている。また、強い日差しを遮るという役目も果たしていて、日差しが強いといったこの地域の気候に適応した形式となっている。一方、馬頭壁は構造的な意味はもたず、壁内部の構造は木構造で単体として成立している。馬頭壁と内部の柱などの木材は金物を利用して、繋がれている。この金物を建物の外壁表面に見ることができ、これが外壁に現れる点が、徽州建築の外観の特徴となっている。

この地域は1つの集落に人口が密集し、住宅も高密度で形成された。そのため、住宅間の距離が近く、一軒は複層で構成される。そのため、中国の住宅に適応されるとする、南北方向に面して建てられるという原則が、すべての住宅に適応されない。



写真4 歙県昌溪村 航空写真



写真1 天井

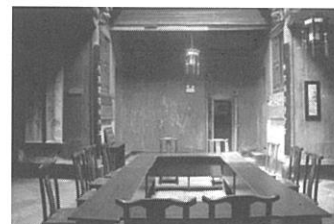


写真2 リビング

#### 3.3 建築構法

中国には伝統的な建築構法として、抬梁式、穿斗式、井幹式の3つの構法が存在する。ここでは、中国でより多くの事例が見られる抬梁式と穿斗式について取り上げ、考察に加える。

## (1) 抬梁式

抬梁式の大きな特徴は、梁を用いる点にある。基本的な形式は、直立する2つの柱の柱頭に梁を載せ、梁の上にさらに短い柱を載せて次梁を支える、というように部材を積み上げていく。また、「斗栱」などが加えられる例もある。この構法では、建物の内部空間を広く利用することができる。

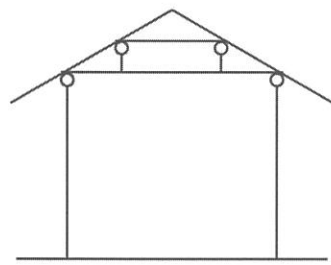


図5 抬梁式

## (2) 穿斗式

穿斗式の大きな特徴は、貫の技術を用いる点にある。柱頭に桁を載せ、各柱の間に穴を開けて、穿枋(日本での貫)という部材で穿って貫通させて骨組をつくっている。さらに、斗枋という部材で各架構をつないで堅固な構造になる。基本的には、束と柱で母屋を支える構造である。また、建物の内部空間を拡大するために、一部抬梁式と融合させた例なども見られる。

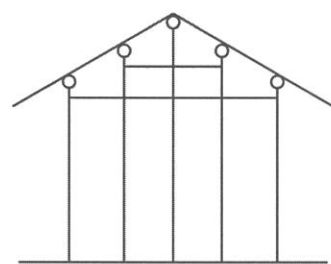


図6 穿斗式

## 4. 徽州民家分析

### 4.1 平面形式

中国の伝統的な住宅の形式として伝わる四合院(図7)と徽州民居(図4)の比較を行うと、徽州民家には平面形式に独自の特徴が表れていることがわかる。

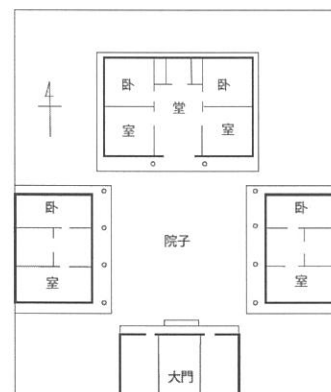


図7 四合院 平面形式

徽州民居では、個人のプライベート空間としての部屋が存在し、リビングを取り囲むように四隅のうち2つまたは4つに各部屋が配置される。一方、四合院は長方形の敷地の各辺に沿うように建物が配置される。この点において、徽州民家の特異性が確認できる。さらに、徽州民家は天井(テンチョウ)をもち、2階部分の回廊は1階部分に対し、張り出すような形をとる。そのため、1階と2階で柱位置が異なるといったケースが多く見られる。このような結果、徽州民家は複雑な架構形式をもつようになったと考えられる。

## 4.2 架構形式

現地の大学、黄山学院が安徽省黄山市歙県昌溪村の建築物に関する調査結果をまとめたものである『歙県昌溪村古建築調査研究及測量作品集』をもとに、徽州民居の架構形式について分析を行うと、この地域の建築には「穿斗式」が広く用いられていることが判明した。民家だけではなく、祖先を祀る場として建設される祠堂や、当時飲食店として利用された建物など、すべてが、同じ穿斗式でつくられている。よって、昌溪村に現存する建物が建設された当時、この地域では、一般的な構法として穿斗式が定着していたと考えられる。

また、徽州建築の意匠の特徴が、架構形式にも大きな影響を及ぼしている。建物が複層で構成され、1, 2階で柱位置が異なるといった特徴のため、複雑な架構形式をとる。基本的に建物の外側の柱は2階まで通っているが、内側の管柱は下の階の柱位置と異なることが多く、床梁を設けその上に2階の柱を配置している。中軸線に沿って、平面がほぼ左右対称の形のため、桁行断面も左右対称の形となるが、天井や部屋の配置といった要因により、梁行断面は左右対称とならないことが多い。

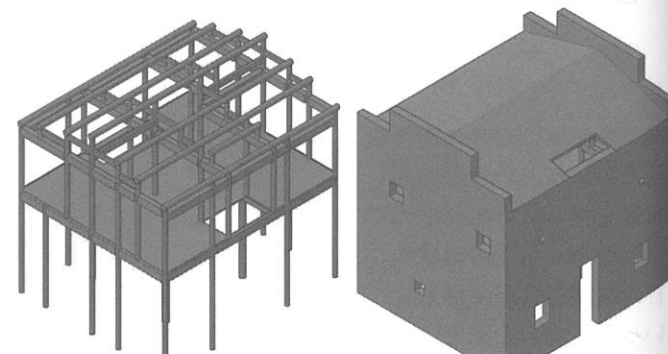


図8 徽州民家 架構形式

『歙県昌溪村古建築調査研究及測量作品集』より作成

## 5. 架構形式の分布

中国に伝わる2つの伝統的架構形式は、それぞれの地域によって、どちらか一方の架構形式を用いる傾向がある。主に、中国南部の地域では「穿斗式」、北部の地域では「抬梁式」が用いられるとされている。文献資料をもとに平面図や断面図、写真などを用いて、中国の各地域でどちら架構形式が用いられるのか詳細を分析する。中国の各地域の建築物について、用いられていた架構形式を下の表に示す。

表2 架構形式分布

|                   | 穿斗式 | 抬梁式 |
|-------------------|-----|-----|
| 遼寧省 <sup>3)</sup> |     | ○   |
| 河北省 <sup>4)</sup> |     | ○   |
| 北京市 <sup>4)</sup> |     | ○   |
| 山西省 <sup>4)</sup> |     | ○   |
| 山東省 <sup>4)</sup> |     | ○   |

|                      |   |   |
|----------------------|---|---|
| 河南省 <sup>4)</sup>    |   | ○ |
| 陝西省 <sup>4) 5)</sup> | ○ | ○ |
| 江蘇省 <sup>6)</sup>    |   | ○ |
| 安徽省                  | ○ |   |
| 湖北省 <sup>2) 7)</sup> | ○ |   |
| 四川省 <sup>8)</sup>    | ○ |   |
| 浙江省                  | ○ | ○ |
| 江西省 <sup>9)</sup>    | ○ |   |
| 湖南省 <sup>10)</sup>   | ○ |   |
| 貴州省 <sup>11)</sup>   | ○ |   |
| 雲南省 <sup>2)</sup>    | ○ | ○ |
| 福建省 <sup>12)</sup>   | ○ |   |
| 台湾                   | ○ |   |

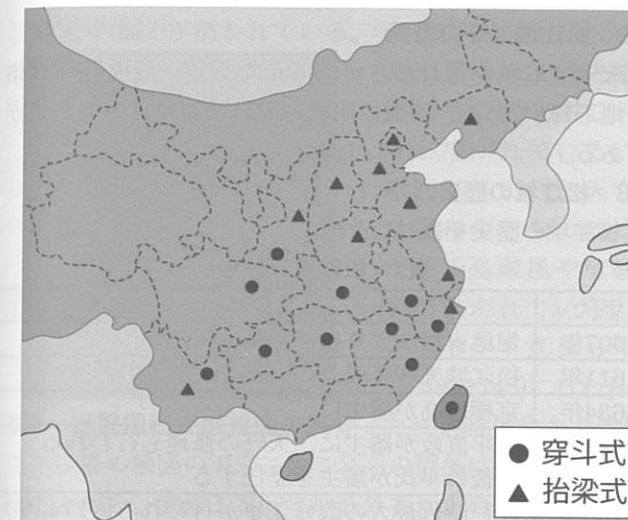


図9 架構形式分布図

大きくくりでは、長江流域周辺を境に南北で架構形式が分かれています。さらに、中国東部、安徽省近隣の地域に限定して見ると、安徽省の東側に位置

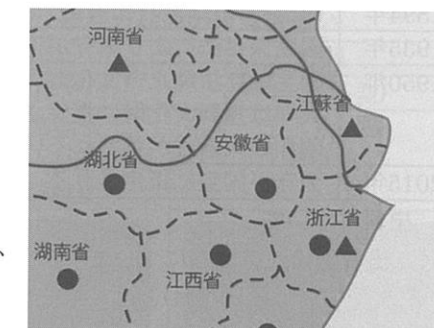


図10 黄山市周辺

する江蘇省は抬梁式、南側の浙江では穿斗式や穿斗式と抬梁式の混合形式が使われた例がみられる。これだけ近い地域で、架構形式が異なることを考えると、安徽省周辺の地域が建物の架構形式の差異を生む、境界の1つとなっていると推測できる。また、陝西省や浙江省のように穿斗式と抬梁式の両方が用いられ、穿斗式と抬梁式が混合した架構形式を用いる混在地域も存在する。

## 6. まとめ

徽州建築の民居は、その地域の職業やライフスタイル、気候といった様々な特徴から特異な住宅の意匠的要素、

平面形式を持っている。さらに、そのような形式を構成するため、複雑な架構形式をとっていると考えられる。また、中国の伝統的な架構形式を、近くの地域と比較すると、安徽省の東部江蘇省が抬梁式、南部浙江省が混在地域となっている。黄山市の商人は長江を利用した交易で、東部の江蘇省地域と、西部の湖北省、江西省地域と交流があった。当時、文化の中心は江蘇省の蘇州地域とされ、西部地域は、農業を中心として栄えていた。建築技術に関して、安徽省は、江蘇省の文化を取り入れることはなく、西部地域と同様の架構形式を採用し、現在まで穿斗式架構が広く使われている。一方、同じ穿斗式で建てられた江西省北部の民居の事例と比較する。江西省の民居も天井住宅と呼ばれ、平面形式が安徽省の事例と非常に類似している。しかし、断面の比較で柱位置などの項目で違いが見られる結果となった。

このように、安徽省の民居を周辺地域の事例と比較すると、他地域と異なる平面形式の特徴をもつため独特な架構形式をとる。安徽省の民居は中国の中でも特異性を持った形式であるということができよう。

## 参考文献

- 1) アンドリュー・ボイド(1979)『中国の建築と都市』田中淡訳 鹿島出版会
- 2) 劉敦楨(1976)『中国の住宅』田中淡・沢谷照次訳 鹿島出版会
- 3) 小川裕充・弓場紀知編(1998)『世界美術大全集 東洋編5 五代・北宋・遼・西夏5』小学館
- 4) 李雅濱・土本俊和(2012)「中国伝統大木構造における棟持柱に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2012年9月, pp.445-446
- 5) 王嫻・松野浩一(2014)「中国陝西南部地域における木造古民家の架構形式に関する研究(その1)現地調査と架構形式の特徴」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2014年9月, pp.601-602
- 6) 姚承祖(1986)『营造法原』中国建筑工业出版社
- 7) 劉世昭(2007)「世界遺産めぐり(46)湖北省・十堰市 武当山の古建築物群 自然との融合を体現した道教の聖地」,『人民中国』2007年11月, pp.42-49, 人民中国雑誌社
- 8) 李強・曹毅・杉野丞・張葉茜(2014)「四川省峨眉山市山間地の民家建築の事例について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2014年9月, pp.713-714
- 9) 黄浩編(2008)『中国民居建筑丛书 江西民居』中国建筑工业出版社
- 10) 土田充義・楊慎初(2003)『中国湖南省の漢族と少数民族の民家』中央公論美術出版
- 11) 鈴木喜一(1999)『中国民家探訪事典』株式会社東京堂出版
- 12) 林琳(2013)「大仏様建築と中国福建省における宋代遺構の架構類似比較」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2013年8月, pp.369-370